

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884031

研究課題名(和文) ツォンカパを中心とするチベットの仏教と美文詩に関する総合的研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Study on Buddhism and Poetic Literature in Tibet Around the Time of
Tsong kha pa

研究代表者

根本 裕史 (Nemoto, Hiroshi)

広島大学・文学研究科・准教授

研究者番号：00735871

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究(課題名：ツォンカパを中心とするチベットの仏教と美文詩に関する総合的研究)は、チベット仏教ゲルク派の創始者ツォンカパ・ロサンタクパ(1357-1419)の中観思想の特色と、それが後代に与えた影響を、思想史的観点から考察すると共に、卓越した詩人としても知られるツォンカパの詩作品を中心として、14世紀から15世紀頃のチベット古典文学の形成と発展を分析することにより、当時のチベットにおける仏教思想と文学世界の融合がいかにして成立したかを明らかにするものである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the process of the integration of Buddhist thought with poetic literature in Tibet during the 14th and 15th centuries. The following points are examined in detail: Tsong kha pa's view of the Madhyamaka thought, its impact on later Tibetan scholars, the stylistic features of his poetic works, and the development of ornate poems in Tibet during the 14th and 15th centuries.

研究分野：仏教学

キーワード：チベット仏教 中観思想 縁起 詩論

1. 研究開始当初の背景

仏教と美文詩はチベット伝統文化を支える二つの重要な要素であり、ツォンカパ(1357-1419)はチベット文化史の中で、その双方の形成と発展に著しい貢献をした人物である。彼はインド伝来の仏教思想を独自の視点から体系化し、後にゲルク派と称される一大宗派を築くと共に、13世紀頃からチベットに伝わったサンスクリット修辭学(カーヴィヤ)の知識を積極的に吸収し、自らの思想をチベット語の美文詩で綴ることに力を注いだ。チベットの仏教思想家達の著作は、ツォンカパを境にして内容の点でも形式の点でも大転換を遂げたと言えるであろう。15世紀以後のチベット仏教思想は、ツォンカパの体系を受容し発展させたゲルク派と、彼の見解を激しく批判する他宗派との拮抗を軸に展開された。他方でツォンカパが本格的に取り入れた美文詩の伝統は、宗派を問わず、後代のチベットの学者達の間で広く受け入れられている。

欧米や日本におけるツォンカパ思想研究は20世紀前半に始まり、1980年代以降に本格化した。近代仏教学の成果の活用や、現代のチベット人学僧との共同研究などを通じてツォンカパの中観哲学、経典解釈学、認識論、修道論がかなりの程度まで解明され、英訳や和訳も数多く出版された。その一方で忘れてならないのは、チベット本土においても近代的なツォンカパ研究が着手されていることである。この潮流を促進させたのはアムド地方(青海省・甘肅省)の古典文学研究者達である。一例を挙げれば、青海師範大学(西寧)の研究者達によって編纂された『チベット古典文学史』(Bod kyi rtsom rig lo rgyus, 青海民族出版社, 2008年)は「ツォンカパの美文詩」に一つの章を割いており、詩人としてのツォンカパに新たな光を投げかけている。

こうした中、当研究者は現代のゲルク派学僧との共同研究を実施し、ツォンカパの中観論書『入中論釈・密意解明』や『中論釈・正理大海』に説かれる時間論に関する研究を進めてきた。また、これと同時に、彼の中観哲学の真髓が説かれる美文詩『縁起讃』の翻訳研究にも携わってきた。さらに、ここ数年はチベット修辭学・詩学にも関心を向け、アムド地方のチベット人研究者の協力を得ながら、後代のゲルク派の学者ジャムヤンシェーパ(1648-1721)の詩の文体に関する研究を行なっている。

2. 研究の目的

以上の成果に基づき、なされるべき課題はツォンカパの仏教思想と美文詩の特色を包括的に捉える視座を提示することである。また、これに付随して必要なことは、彼と同時期に成立したチベット古典文学に目を向け

ることである。インド仏教哲学、サンスクリット文学、サンスクリット詩学が並行して研究され、受容された14~15世紀のチベットで、仏教哲学と文学世界の融合がいかんにして確立したかを明らかにすることが本研究の狙いである。

3. 研究の方法

ツォンカパにおける仏教思想と文学世界の融合を考察する上で特に重要な文献は、彼の中観哲学の真髓が謳われる『縁起讃』と、般若経に登場する説話物語を題材にした叙事詩『常啼菩薩譬喩品』である。次に14~15世紀のチベット古典文学の特色を知る上では、この時代のサンスクリット文学の受容について調査することが不可欠である。特にツォンカパの弟子シャンシュン・チューワンタクパ(1404-69)の叙事詩『ラーマ王物語』や、14世紀に成立したチベット語版『雲の使い(メーガ・ドゥータ)』(4~5世紀の詩人カーリダーサによるサンスクリット叙情詩のチベット語訳)が重要である。この四つの文献について次の研究を実施する。

- [1] ツォンカパ作『縁起讃』の翻訳研究(訳訳を作成済み)を完成させた上、註釈文献等を参照しながらツォンカパの中観哲学(特に縁起思想・自性論・空性論証)を思想史的観点から分析する。また、『縁起讃』に対するインド仏教文学からの影響について考察する。
- [2] ツォンカパ作『常啼菩薩譬喩品』の翻訳研究を完成させ、サンスクリット本『八千頌般若経』や漢文『大智度論』を参照しながら、常啼菩薩の物語に関する比較研究を行なう。
- [3] シャンシュン・チューワンタクパ作『ラーマ王物語』のチベット語校訂本を作成した上、翻訳研究を完成させる。また、インドのヴァールミーキ編『ラーマヤナ』と、敦煌出土のチベット語版『ラーマヤナ』を調査し、物語の伝承について比較と分類を行なう。
- [4] 翻訳官チャンチュブ・ツェモ(1303-80)およびナムカ・サンポ(14世紀)によって翻訳されたチベット語版『雲の使い』を精読し、サンスクリット原典と比較しながら、チベット語訳の特色を明らかにする。また、青海師範大学のギャイ・ジャブ教授と協力して、原典に忠実なチベット語の新訳を完成させる。

4. 研究成果

上記の研究方法に基づき、以下の成果を挙げた。

- [1] ツォンカパ『縁起讃』およびその関連文献に依拠し、ツォンカパの縁起思想の特

色を明らかにした。特に「およそ縁起するものは無自性である」という伝統的な思想の解釈に見られる彼の自性論を検討し、彼の理論は、インドのチャンドラキールティの説を基盤とし、独自の言語論的分析の上に成り立つものであることを詩的した。その成果を雑誌論文に公表した。

- [2] ツォンカパは、「縁起すること」を証因として諸事物は無自性であることが論証されると理解しているが、その場合に論証が持つ意味とは何であるかという問題について、後代のジャムヤンシェーパの解釈を援用して検討した。その結果、彼らにとって、縁起証因に基づく空性論証は、既に中観の知見を得た智者にとってのみ有効であることを解明し、論証が修道論の上にこそ成り立つという点を指摘した。その成果を雑誌論文として公開した。
- [3] ツォンカパの『縁起讃』『常啼菩薩譬喩品』、彼とほぼ同時代に成立したチベット語版『雲の使い』、並びに後代のチベット詩論書に依拠して、ツォンカパの詩的世界の諸相、特にサンスクリット詩論に由来する隠喩の使用について明らかにした。また、ツォンカパの『縁起讃』が、論理学・修道論・修辞学をいずれも重要視する彼の学問観を如実に体現した作品であることを明らかにした。それらの成果を雑誌論文として公開した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

根本 裕史、ツォンカパによる自性(rang bzhin)の解釈、『比較論理学研究』13、2016、pp. 67-87、査読有

Hiroshi Nemoto, Buddhism and Poetry in Tibet: A Study of Tsong kha pa's *rTen 'brel bstod pa*, 『印度学仏教学研究』、pp. 64-3、2016、pp. 241(1283)-248(1290)、査読有

根本 裕史、ツォンカパ『縁起讃』の文学世界、『日本西蔵学会々報』(日本チベット学会) 61、2015年、pp. 17-28、査読有

根本 裕史、ジャムヤンシェーパ中観思想における論証の役割、『哲学』(広島哲学会) 67、2015、pp. 29-41、査読有

根本 裕史、ツォンカパの詩的世界: 『縁起讃』研究(4)、『比較論理学研究』12、2015、pp. 69-95、査読有

根本 裕史、チベット中観思想における自性の概念、『インド論理学研究』7、2015、pp. 283-300、査読無

[学会発表](計6件)

Hiroshi Nemoto, Why Do We Need to Study Logic and Epistemology? A Reflection from the Perspective of Tibetan Buddhism, 「2015 藏傳佛典漢譯之重要性與未來展望」學術研討會、法鼓文理學院・欽哲基金會、台湾、2015年11月20日

根本 裕史、チベット仏教における論理学・認識論の宗教的意義、第66回広島哲学学会学術研究発表大会、広島大学、2015年11月7日

根本 裕史、チベットにおける仏教と詩 - ツォンカパ『縁起讃』を中心に -、日本印度学仏教学会第66回学術大会、高野山大学、2015年9月19~20日

Hiroshi Nemoto, *rTen 'brel bstod pa'i skor dpyod pa* (チベット語による発表、邦題: 「縁起讃」についての考察)、宗喀巴国際学術研討会、青海民族大学、中国、2015年7月11日

根本 裕史、ジャムヤンシェーパの空性論証と修道論、第65回広島哲学学会学術研究発表大会、広島大学、2014年11月1日

根本 裕史、ツォンカパ『縁起讃』の文学世界、日本チベット学会第62回大会、苫小牧駒澤大学、2014年10月25日

[図書](計0件)

[産業財産権]
出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根本 裕史 (NEMOTO, Hiroshi)

広島大学大学院文学研究科・准教授

研究者番号：00735871

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：